

「正信偈」について（第二十回）

正信偈の教え 下 古田和弘、正信偈のこころ限りなきいのちの詩 戸次公正、等による

ほんじげんくうみようぶつきよう

本師源空明佛教

本師・源空は、仏教に明らかにして、

れんみんぜんまくぼんぶにん

憐愍善悪凡夫人

善悪の凡夫人を憐愍せしむ。

しんしゅうきようしようこうへんしゅう

真宗教証興片州

真宗の教証、片州に興す。

へんしゅう

せんじやくほんがんぐあくせ

選擇本願弘悪世

選択本願、悪世に弘む。

げんらいしようにじりんでんげ

還来生死輪転家

生死輪転の家に還来することは、

りんでん

かえ

けつちぎじよう いしよし

決以疑情為所止

決するに疑情をもって所止とす。

そくにゆうじやくじようむいらく

速入寂靜無為樂

速やかに寂靜無為の樂に入るこ

すみ

みやこ

い

ひつちしんじんいのうにゆう

必以信心為能入

必ず信心をもつて能入す、といえり。

〔意訳〕

私たちの祖師、源空上人は、釈尊の教えの本意を明らかにされ、善悪一切の凡夫を哀れんでくださり、真宗の教えと証を片隅の国、日本に興された。選択本願の念仏をこの悪世に弘められた。

迷いに流転する家に立ち戻ってしまうのは、間違はなく、疑いの心を依り処とするからである。

速やかに静かな涅槃の安樂にいたるのは、必ず疑われない信心によるのだと、教えられた。

私たちの祖師、法然房釋源空上人は、釈尊の教説である膨大なお経と、それらのお経に対する先人たちの解釈などを精力的に学ばれ、釈尊の教えの全体を解明された。阿弥陀仏の本願が、善悪にかかわらず、悩み多いすべての凡夫を憐れんで発おこされている慈愛であること、そして凡夫は、本願に素直に順したがうしかないことを説き示されたのが、釈尊の慈愛であることをも、法然上人は明らかにされた。

法然上人こそが「真宗」即ち人類の日常にとって最も大切な教証である、「選択本願」を、この世界の片隅である日本に興隆させて下さったと、喜んでおられます。真実に無知であり、教えに背を向けている凡夫、いわばどうにもならない凡夫をこそ往生させたいと願われた「本願」、つまり「阿弥陀仏によって選えび取られている願い」が現にはたらいっていることを、この悪世に弘めてくださったのです。

まるで、人が故郷の家を懐かしむかのように、私たちは「生死」(迷っている状態)が自分の還かえるべき所であるかのように錯覚して、すぐに迷いに立ち戻ってしまうのです。それは、教えに触れるに先立って、自分が心に懐いだいている思いを重視しているからです。仏の教えを疑い、自分の考えを信じてしまう、そのことが間違っているからです。

それでは、どうすれば、生死に流転するという苦悩から離れて、本当の安楽に至ることができるのか。人が悩んだり苦しんだりするのは、自我へのこだわりや、飽くことのない欲望など、さまざまな煩惱が原因であるとされています。その煩惱から離れて、もはや煩惱に乱されなくなった寂靜な境地が「涅槃」なのです。

前の句では、「疑情をもって所止とす」とありますが、ここでは「信心をもって能入とす」とあります。この二句が対照となっており、「疑情」の反対が「信心」です。真実よりも、自我を優先させることによって、真実を疑う情が生じますが、その疑いの情がないことが、信の心なのです。